

## テーマ：高齢者の居場所づくり

班員：(五十音順)

上野一美、大島照作、大島光芳、北川輝樹、中村真二、峰村恒雄、村松かずみ

### ●背景

高齢化に伴い介護保険事業の費用が膨らむ一方、労働人口が減少し、保険料負担が急上昇。費用の抑制対策が、机上の論理により、行政主導で進められている。

利用者の立場から何が良いかの検討より、従来からの補助金方式の発想や経済効率の発想が先行し、実情にそぐわず、続かなくなる懸念を抱く。具体的には、補助金を用意してもハードルが高いとか、良い評価は一部に止まるとか、補助金は出しても一時的になる等、高齢者の居場所づくりが、かえって混乱する可能性を懸念。

良い方向に進める為に必要な鍵は、市民との協働。昼班のメンバーで、視察研修や自分達の活動経験を踏まえて意見交換を重ね、市民の立場から、高齢者の居場所づくりで重要になると思われる要素を拾い出し、整理を試みた。

### ●「高齢者の居場所」の望ましい姿（イメージ）

- ・対象は、退職したばかりの方々から、要支援 1・2 程度までを想定。
- ・自助、互助(助け合い)、共助(保険制度)、公助(税金投入)のうち、互助を中心にする。昔ながらの互助の復活ではなく、今の世代も受け入れやすい「新しい互助」を模索。⇒ 理想としては、「喜びを分かち合う場所」
- ・少し分解すると、「喜んでもらえる人を見つける場所」、「話しの合う仲間を見つける場所」、「話を合わせられる人に来てもらう場所」。これにより、高齢者の人生で、生き活きた年月がもっと延びることを期待する。

### ●懸念される事態

- ・対象になる方々の健康状態は、非常に幅広い。活発に動ける方、介護一步手前の方、その中間。このうちの一部にしか対応できず、尻つぼみになる懸念。
- ・茶飲み話が始めると、そこに居ない人の噂話や悪口になって、雰囲気が悪くなり、段々と人が集まらなくなる懸念。等々

### ●現状

- ・上越市内では、高齢者の居場所として、上手く運営出来ている例は、数少ない。
- ・町内会で定期的にかいていたのが、世話人の高齢化で、廃止になった例もある。

## ■手の打ちどころ 順調に進むための鍵を、キーワードで集類 ⇒(図解参照)

【利用者の目線で考えると】

- ① 漫然と集まるお茶会では失敗しがち。一言で表せば「ゆるいカルチャー教室」の要素を取り入れる。初心者から上級者まで一緒に楽しめる。コミュニケーションの手段になれば良いのであり、上達は二の次。
- ② 少し分解すると、利用者の主体性が最大限尊重される。やりたい事を持ち寄る。役割を自覚しつつ、互いの働きも認め合う互助。何かしてもらう老人会から、やりたいことを学ぶ寿大学に。一言で表せば「自発性と人に認められる喜び」
- ③ 人が集まる所で「気分良く過ごす」には、人間関係がいつも課題。もつれる前に、

離れる自由さも必要。なので、固定的ではない、柔軟な人間関係を目差す。ゆるやかな小グループが幾つも集まり、所属の重複も、移動も自由で寛容。

- ④ 利用者の中で、先輩後輩の関係が強まると、人間関係が固定化し、新しい風が入らなくなる。老化の程度に応じて、クラス分けをする。他人の世話も出来そうな元気な高齢者は「初老学級」。介護手前の高齢者は「大老学級」。他人の世話は御免という中間の高齢者は「中老学級」。進級の仕掛けをつくり、人の停滞を防ぐ。

#### 【 運営側の目線で考えると 】

- ⑤ 開設のハードルを下げる必要がある。市民有志や町内会、NPO法人、企業、団体が、それぞれ持っている資源や意欲に応じて、様々に取り組みよう、支援すべき。多様な取組みの中から、有望な事業者が育っていけば、住民の様々なニーズに応えられ、長続きする取組みも期待できる。行政は、規制や補助金で縛り過ぎない。事業者どうしても横につながれば、運営の苦労も精神的に楽になる。事業者の力や資源に合わせ、運営ノウハウや事務局機能を支援する組織を結成できれば、慣れない取組みであっても、成功の確率は高まる。
- ⑥ 受益者負担を基礎に、各種支援も加えながら、資金的にも回して行ける仕組み。人員ローテーションを確実にするには、無償ボランティアより、有償ボランティアで、より多くの協力者を確保しておく必要がある。低廉な費用で場所が使えるとか、無償提供品が使えるとか、地域の方々の様々な支援がないと、資金的には行詰る可能性がありそう？
- ⑦ 地域の皆さんとつながれば、運営の大きな助けになる。子供と接することで、高齢者は元気をもらえる。ただし、高齢者との接し方に不慣れな子供も多くなっており、接し方を教わる必要もある。初老学級の方々には適任の役割と推察。高齢者に接する機会が少ない子供には、社会勉強にもなる。
- ⑧ 儲からない互助的な事業なので、善意や熱意が頼り。利用者の喜びを自分の喜びにできる人からスタッフになって頂く。人材育成には、企業経営とは一風かわった注意点も必要。特に、スタッフの自発性や自立性を伸ばし、「自分の提案が試せる」という面白さを感じ取って頂くことが、低い報酬の補完になる。次のリーダーが育てば、ノレン分けも可能になり、高齢者の居場所づくりが、地域に広まるはず。
- ⑨ 事業内容が充実してくれば、当初の役員の役割も自ずと変化してくる。今迄の役割に拘り続けていると、事業は尻つぼみになっていく。自分で新しい役割を探して行くとともに、今迄の役割を後進に譲る必要がある。

#### ●まとめ

高齢者の居場所づくりとしては、河田圭子さんが始められた「地域の茶の間」が有名。今回、当班のグループで取上げた「高齢者の居場所」は、介護予防的な性格に特化しており、河田さんが始められたものより、限定的である。『地域の茶の間は、比較的容易に始められる。』と言われるが、中身を充実させ、持続させようとするれば、結構、難しい面もある。一方では、楽しみな面もあり、両方を垣間見た気がする。課題を乗り越え地域に根付くには、運営ノウハウ等を支援する組織が必要と考える。

また、当班では、コミュニケーションが前向きに活性化することを期待し、手段として「ゆるいカルチャー教室」の要素を取り入れることを推奨する。